

165 肉腫患者における免疫モニタリングによる新規治療開発

小林 英介

【目的】本研究は、肉腫（骨軟部腫瘍）領域において、標準治療として一般的に行われている手術や抗がん剤治療レジメンが、免疫機能にどのような影響を及ぼすかを解析することを目的とし計画した。免疫機能が受ける影響にレジメン間で差を認めたり、抗がん剤が免疫機能に与える影響に個体差があることが確認できれば、新たな視点による個別化医療開発や免疫療法との併用療法の開発、新規予後マーカーの開発にもつながることが期待される。

【方法】2015年4月に国立がん研究センター中央病院研究倫理審査委員会の承認を得た上で、悪性骨軟部腫瘍患者のうち、標準治療である1. 手術単独例、2. 新規術前化学療法導入例、3. 進行例に対する化学療法例の患者を対象に実地臨床に合わせて各3ポイントでの前向き採血を実施した。採取後、末梢血リンパ球（peripheral blood mononuclear cell: PBMC）を分離し、一部を凍結保存、一部をflow cytometryにてT細胞のフェノタイプ・活性化マーカー、各種免疫抑制細胞などの解析を予定した。

【結果】2017年3月までに105症例（1. 51例、2. 19例、3. 35例）に対して免疫モニタリング採血を施行した。疾患内訳は、脂肪肉腫28例、UPS15例、骨肉腫12例、粘液線維肉腫9例、デスマイド8例、軟骨肉腫7例、他26例であった。現在までに免疫抑制細胞骨髄由来免疫抑制細胞（Myeloid-derived suppressor cell: MDSC）サブセットである単球系MDSCと顆粒球系MDSC、及び樹状細胞（Dendritic Cell: DC）のサブセットであるmyeloid DCとplasmacytoid DCについて解析を行った。1. 手術単独例及び2. 新規術前化学療法例では加療前後でMDSC、樹状細胞で優位な差はみられなかったが、3. 進行例に対する化学療法例では加療前後で単球系MDSCが有意な減少を示した。

進行例に対する化学療法症例における加療前後単球系MDSC

